

内大臣の研究

——明治憲法体制と「常侍輔弼」——

松田好史

本論は、内大臣による「常侍輔弼」のあり方の変遷をたどり、その変化が天皇・元老・内閣のあり方及び内大臣就任者自体の変化とどのように関連しているのか、またその変化が輔弼諸機関間の調整にどのような影響を及ぼしたのかを検討し、明治憲法体制下における国家意思の形成と、その中での中での宮中の役割を考察するものである。

明治二年（一八八九）の大日本帝国憲法及び皇室典範の制定により、坂本一登氏のいうところの「宮中の制度化」は一応の画期を見たが、この体制は内閣・陸海軍・枢密院・議院等の諸機関がそれぞれ独立して天皇を輔弼・輔翼する分立的なものであり、各機関間の調整は、名目上万機を総攬するとされた天皇と、維新の功臣であり藩閥の実力者でもある元老達との属人的な政治力に依存していた。

しかし、明治憲法制定時に青年期から壮年期にさしかかり、徐々に君主として円熟味を加えつつあった明治天皇も、また手分けして諸輔弼機関を把握し、天皇を輔佐して明治政府を仕切っていた元老達も、共に寿命は有限であることはいまでもない。時期によっては病弱あるいは若年で、調整能力を十分に有しない天皇が出現することは当然に予見されたことであるし、維新の功績に正統性の根拠を有する元老は再生産困難な存在である。従って、彼等の老衰に伴ってこれを補完する必要があるのは必然であり、その意味で明治憲法体制は変質が不可避である体制として、静態的には

なく動態的にとらえられるべきものであるといえる。

天皇及び元老が担っていた総合調整機能は、府中においては政党内閣によって補完されたが、宮中においては、大正期以降、内大臣が首相奏薦・天皇への助言といった「常侍輔弼」——これは官制に具体的な内容の規定がなく、在職者の方針や周囲の状況によって相当に幅のある解釈が可能である——によってこれを補完した。

内大臣は、

（一）天皇を「常侍輔弼」する役割を有し、

（二）国務・宮務双方で元老と役割が混淆している

という二点で、宮中・府中関係において天皇・元老と絡まり合う重要な位置にあった。従って、各時代における内大臣の位置や役割、及びその変遷並びに原因を明らかにすることで、明治憲法体制の「動態」をより明確に描き出すことが出来るであろうし、天皇や元老を理解する上でも、内大臣について把握しておくことが必要と考えられるのである。

従来の内大臣に関する研究は、牧野伸顕就任以降の昭和期に集中する傾向にあった。それは、元老の衰退に伴い、内大臣が大正末期から政治上の存在感を増していったことからして自然なことではあるものではあるが、その反面において、（一）牧野就任以前における内大臣のあり方についての検討が不十分であることが指摘出来るほか、（二）内大臣が官制によって規定された制度上の存在であることや、（三）内大臣たる人物の行動が理念・政治的資源・外部状況に規定されていることについても十全には注意が払われてこなかった憾みがある。

（一）について、大正期の内大臣についての研究が進展しなかった理由としては、「常侍輔弼」を受ける大正天皇が早期に政治的主体たり得なくなったこと、大正前・中期の宮中は元老山県有朋の支配が貫徹された領域として把握されていたため、内部構造への関心が高まらなかったこと、ま

た昭和期に比し、内大臣に関する軸になる史料が乏しかったこと等の影響かと思われる。しかし、これによって、西園寺を除く元老が退場した途端にその機能の受け皿として内大臣が登場し、若い昭和天皇を輔弼する、という描かれ方がなされるようになっており、何故内大臣が元老の機能の受け皿たり得たのか、という点が十分に説明されていない。また、内大臣研究の対象時期の始点が牧野の就任時となっている結果、牧野の「常侍輔弼」を基準とし、それが変形していくという理解がなされがちになっているが、実態としては寧ろ牧野時代の方が特殊な形態であり、より長い射程での研究によって、各内大臣の相対的位置が再検討されなければならない。

(二) については、元々属人的に有している権威と権力を、相互承認によって、あるいは勅語によって確認される元老（彼等はある意味では「超実定法的存在」である）と異なり、内大臣は官制によって規定された「常侍輔弼」を職掌とする官職であり、その政治行動は単なる政治行動ではなく「常侍輔弼」の運用でもある点、また内大臣たる人物が元老級の実力者から高級官僚出身者へと変化していく中で、内大臣の行動が属人的な政治活動（と区別出来ない状態）から職務的な行動へと「制度化」していったことが従来の研究では看過されがちであったが、この変化が「常侍輔弼」のあり方に大きく影響しており、ひいては宮中・府中関係にも影響を及ぼしているのであって、この点に着目した研究がなされる必要がある。

(三) について、各内大臣の有していた理念、即ち天皇の政治関与の度合いや「常侍輔弼」のあり方に関する「べき論」については研究が進んでいるが、各内大臣の行動と、彼等が有していた人脈や地位―「内大臣であること」自体も重要な政治的資源である―、また「常侍輔弼」と府中の意思決定のあり方について、より総合的に検討されるべきであるといえる。そこで本論では、

(一) 内大臣の設置から廃止までを通時的に検討することでその役割

の変化を把握し、個々の内大臣を全体の流れの中に位置付ける
(二) 特に、内大臣の世代交代に伴って「常侍輔弼」がどのように「制度化」され、運用されたかという点、及び府中における政治運営の「制度化」との相互関係にも注目する

(三) 個々の内大臣について、彼等の「常侍輔弼」に、彼等の有する政治的資源―天皇との関係を含めた各種の人脈や「元老」等の資格、経歴から来る専門知識等―や外的要因がどのように影響しているかに注目する

という点に特に留意して、内大臣による「常侍輔弼」を検討し、その変化を追うことで宮中・府中関係のあり方、更には国家意思決定のあり方の変遷を再検討した。

史料面では、徳大寺実則・平田東助・牧野伸顕・斎藤実・湯浅倉平・木戸幸一の各内大臣や松本剛吉・倉富勇三郎・河井弥八・岡部長景・奈良武次・原田熊雄・細川護貞・高松宮宣仁親王等といった刊行・未刊行の宮中関係者の日記及び関係文書を基軸とし、「入江貫一関係文書」のように、従来から存在は知られていたが内大臣研究には余り利用されていなかった史料を積極的に用いた。また、未公開文書として「岩倉具定関係文書」「大久保利武関係文書」をも使用し、それぞれ明治後期の宮中・府中関係、及び昭和初年の牧野内大臣の周辺状況の解明に新知見を加えることに務めた。本論では内大臣を、その「常侍輔弼」の内容から「代行型」と「側近型」の二つの類型に分類している。

「代行型」は天皇または摂政宮に代って、諸輔弼機関間、若しくは諸政治勢力間の調停・調整を行うタイプの内大臣で、初代内大臣の三条実美や桂太郎・大山巖・松方正義といった元老たる内大臣、また元老に次ぐ実力者である平田東助がこれに該当する。

他方、「側近型」は君側に奉仕し、天皇の御下問に応じ相談相手となる

ことで、聖意の形成に参画するタイプの内大臣であり、牧野伸顯から齋藤実・湯浅倉平を経て木戸幸一まで、昭和期に在任した各内大臣はこちらに分類される。明治後期における徳大寺実則もこちらに近いが、彼の政治への関与は情報伝達のようなより軽度のものが中心である。

次に、「常侍輔弼」の形式について、内大臣と他の天皇側近との関係に着目して、「側近集団型輔弼方式」と「内大臣単独輔弼方式」に分類した。

「側近集団型輔弼方式」は、内大臣が宮内大臣や侍従長、更には宮内次官・侍従次長や内大臣秘書官長といった、他の天皇側近の参画を得、彼等と連絡を取り、また協議を行いつつ天皇を輔弼する方式で、第四章でとりあげる牧野伸顯がその典型である。

「内大臣単独輔弼方式」は「側近集団型」とは逆に、内大臣が「常侍輔弼」に当って他の側近を排除し、単独で輔弼を行うもので、官制に基づいて内大臣・宮相・侍従長の役割分担が明確化されることが特徴である。第六章で扱う木戸幸一が典型である。

なお、「代行型・側近型」と「側近集団型・単独型」は座標軸を構成する二つの対立軸ではなく、「側近型」内大臣が「常侍輔弼」をなす際の形式を、「側近集団型」と「単独型」の二類型に区分したものである。

更に先取りしてしまえば、輔弼の内容面では侍従長としての色彩が強い徳大寺を除き、大正期の「代行型」から昭和期の「側近型」へという変遷が指摘出来、形式面では流動的な大正期から昭和零年代の「側近集団型」、更に十年代の「単独型」へという流れが看取出来る。

本論では、内大臣の設置から廃止までを、時系列に沿って検討した。

第一章では、内閣制度の創設に伴う内大臣の設置から、明治期一杯の内大臣と「常侍輔弼」の状況について検討した。最初に論文全体の前提として、内大臣の法的地位とその変遷を検討した上で、三条実美・徳大寺実則両内大臣を中心とした明治天皇の側近の状況を確認し、明治期の天皇側近

間における役割分担は余り固定的なものではなく、各人の得意・不得意や藩閥政治家との個人的関係によって流動的に運用されていたことを明らかにした。また、明治四〇年の公式令制定によって、内大臣と宮内大臣が相互の任免を輔弼することとなったが、これが宮中の独立性を人事面で担保することを目的としたものであることを指摘した。

第二章では、大正天皇の即位に伴う桂太郎の内大臣就任から、大正一一年（一九二二）の松方正義内大臣の退任までを扱った。政治的経験の乏しい大正天皇を輔佐する必要から元老が内大臣を兼ねるようになり、徳大寺の侍従長同様のあり方から「代行型」へと「常侍輔弼」のあり方が変化していく過程を明らかにした。また、内大臣の地位にある元老の政治活動は元老の資格によるものか、内大臣としての「常侍輔弼」か、それとも純然たる属人的な政治活動かという切り分けは不可能であるが、区分が出来ないだけに、元老と内大臣の役割の混交が生じ、内大臣の関与し得る範囲がなしくずしに拡大したことを指摘し、併せて内大臣と他の天皇側近との関係はそれぞれの地位にある人物同士の関係によって区々であり、後年牧野内大臣が構築したような「側近集団型輔弼方式」が必ずしも標準的なものではなかったことを明らかにした。

第三章では、元老の退潮を受けて就任した平田東助内大臣時代を扱い、元老ではない長老政治家の平田が、元老に代る存在として内大臣に就任し、元老兼任の内大臣と同様に、自己の人脈を源泉とする属人的な政治力を駆使して「代行型」の輔弼を行っていたことを明らかにした。また、平田が摂政宮に対して徳育の要素が強い御進講を行っていたことを指摘した上で、平田の退任時に生じた内大臣廃官問題との関係についても論じ、平田の内大臣廃止・侍補設置論が彼の御進講の延長線上にあること、及び後任内大臣候補に東郷平八郎が挙げたのは、平田の君徳輔導重視を踏まえた対案であったことを明らかにした。

第四章では、牧野伸顕内大臣時代を扱い、牧野が当初は府中に対して直接的な介入を試みたものの、政党内閣という「制度化」された府中への影響力行使の限界と、昭和天皇の即位による大権総攬者の出現とによって、天皇の相談相手として聖意の形成に参画する「側近型」の輔弼へと転じていったことを明らかにした。また、従来「宮中側近」または「牧野グループ」と称されている集団は「山県系」のように牧野の子飼いを集めて形成されたものではなかったことを指摘した上で、出仕する頻度が低い牧野が「側近型」の輔弼をする際の連絡上の必要が、宮中での意思決定に他の側近が介入する契機となったこと、即ち内大臣の機能上の側近化が、宮中への常時出仕という空間的・物理的な側近化に先行したことが「側近集団型輔弼方式」の形成要因であったことを明らかにした。

第五章では、斎藤実・湯浅倉平両内大臣の時代を扱った。斎藤内大臣時代も「側近集団型輔弼方式」が継続していたことを確認した上で、湯浅内大臣の就任後に同方式が崩壊し、木戸幸一内大臣時代にかけて「内大臣単独輔弼方式」へと移行、定着していく過程を明らかにし、その原因が内大臣が常時出仕するようになったことと、天皇及び湯浅・木戸が側近の役割分担の厳格化を志向していたことにあることを指摘した。

第六章では、木戸幸一内大臣時代を扱い、木戸が首相奏薦・宮中府中関係・側近間の関係の全てにおいて、職務の切り分けと制度的運用を志向し、「常侍輔弼」の制度化を図ったことを明らかにした。また、木戸による「側近型」の「常侍輔弼」の特徴として、政界各方面から天皇へもたらされる情報の選別や天皇周辺からの情報漏洩の防止といった、「情報管理者」的なあり方を指摘するとともに、それが天皇との密着によって可能となっていたことを明らかにした。

右のような内大臣及び「常侍輔弼」の変遷を踏まえて、内大臣そのものの変化、天皇・元老・内閣及び他の天皇側近との関係について整理してお

こう。

三条実美は格下の元老と同程度の属人的政治力を有し、天皇の御下問を受けるほか、藩閥の混乱時に首相を兼任する等府中の事項にも適宜関与した。

徳大寺実則は天皇と元老や閣僚等の間の連絡役を主たる任務としており、後年の侍従長程度の軽度の政治関与に留まったが、これは明治天皇が円熟期に入っていたこと、複数の元老が天皇への助言や政府全体の調整を行っており、徳大寺が出る幕は無かったためであった。また、岩倉宮相とは相互補完関係にあった。

桂太郎は、元老の資格を有する有力政治家で、常時出仕して宮中・府中双方に対する影響力を発揮した。これは、政治的経験の乏しい大正天皇を輔弼する必要があったこと、元老級政治家の中では最も若く「常侍」することが可能であったことが背景にある。しかし、桂はその影響力を行使して第二次西園寺内閣を倒し府中に転出したため、内大臣としての活動は短期間で終った。

大山巖・松方正義は共に元老であり、宮中のことは勿論、政変時等を中心に府中の案件にも関与した。大正天皇の体調悪化に伴い、国家の重臣の輔佐で「君側に重みを増す」必要があったこともあり、桂に引き続き元老自ら「常侍輔弼」を行ったものである。大山は他の元老と共に第二次大隈内閣と対峙し、松方は原首相と協調して宮中某重大事件や東宮外遊、摂政問題に対処した。後者は宮中問題及び宮中・府中にまたがる案件が中心である。松方は牧野宮相を自己の協力者としており、宮中問題のみならず首相奏薦にも関与させた。

平田東助は元老に次ぐクラスの有力政治家であり、摂政宮（及び元老）の代行者として諸輔弼機関を調整した。摂政宮は政務の練習段階にあったこと、西園寺が自身の府中への影響力行使に慎重であり、他の元老は死

去したこと、府中の側では平田の人脈を活かしやすい官僚系の中間内閣が続いたことが背景にある。平田と他の天皇側近との関係は比較的希薄であった。

牧野伸顕は平田同様元老の次の世代の有力政治家であったが、府中への直接的な影響力の行使は早々に止め、天皇への助言を中心とした「側近型」の輔弼を行うようになる。これは、宮中には意欲的な君主である昭和天皇が出現したこと、及び府中では政党内閣が出現し、元老程大くない牧野の属人的な政治力では影響を及ぼしにくい、自己完結的な意思決定がなされるようになったことによる。また、牧野は別荘にすることが多かったため、遠隔地において天皇の相談相手となるための補助システムとしての「側近集団型輔弼方式」が形成された。元首相で海軍の長老である齋藤実は牧野に似た輔弼を行ったが、牧野より出仕の頻度は増大し、より側近化が進行した。

高文官僚出身の湯浅倉平は宮中に常時詰めて随時天皇の御下問に与るようになった反面、府中に対して自力で介入するだけの力はなく、「側近型」の輔弼が定着した。また、内大臣が常時出仕していること、及び天皇や湯浅の意向等から、側近間で官制に忠実な役割分担がなされるようになった。

木戸幸一は湯浅時代より一層「側近型」の輔弼を徹底させ、天皇と密着して常に意思疎通を図る（その際、木戸が内大臣秘書官長時代に培った情報収集・管理能力が活用された）と共に、側近間の役割分担も引き続き維持し、「内大臣単独輔弼方式」を定着させた。府中に対しては当局者を重視する方針をとっており、天皇にも御下問による当局者との対話を推奨した。尚、元老西園寺は湯浅時代の後半から首相奏薦にも消極的になり、木戸内大臣時代の初期にかけては影響力を消失するに至った。

以上から、内大臣を視座の中心におくことで、

(一) 大正天皇の即位に伴い元老による「代行型内大臣」が登場し、

昭和天皇の即位後「側近型内大臣」に移行、昭和天皇の政治的成長と内大臣の高文官僚への世代交代に伴い側近化が進んだ。

(二) 元老との関係では、元老の兼任によって首相奏薦及び輔弼機関・政治勢力間の調整機能が「常侍輔弼」の内容となりかかったものの、後者は有力政治家の私底並びに府中との関係の変化により定着せず、府中における調整に委ねられた。その後元老の退潮により、首相奏薦と宮中の監督は内大臣の役割として定着した。

(三) 府中との関係は、明治期には徳大寺自身が政治家としては軽量であったため連絡役が中心であった。大正期に元老が内大臣を兼ねるようになると、元老の属人的な政治活動と内大臣の職務的な行動とが混淆し、中間内閣期を中心に内大臣が天皇を代行して諸輔弼機関間の調整に当る事例が出てくる。しかし、自己完結的な意思決定が可能な政党内閣が成立すると内大臣の介入の余地は小さくなり、内大臣から天皇へ助言し、天皇から注意を与えるという形で関与に変化する。政党内閣制の崩壊後は再び中間内閣が組織されるようになるが、今度は内大臣の方が属人的政治力の小さい官僚出身者となっていたため、内大臣が直接的な影響力を回復するには至らなかった。

(四) 他の天皇側近との関係は、明治期～大正前半期については内大臣と宮相の個人的関係によって区々であったが、松方内大臣が牧野宮相を協力者としたのを嚆矢とし、牧野内大臣が宮相・侍従長等の協力を得て「側近集団型輔弼方式」を展開した。これは在京しないことが多い牧野が側近型の輔弼をする必要から生じたもので、齋藤内大臣時代までは踏襲されたが、昭和一〇年代に入ってから内大臣が「常時」出仕するようになると「内大臣単

独輔弼方式」へと移行した。

と、明治憲法体制の中枢部分に位置する諸要素の変遷を整理することが可能となるのである。

また、右を踏まえた上で明治憲法体制全体の中に内大臣を位置付けるのならば、

(一) 三条内大臣は藩閥政府の混乱時に元老達を調整し得る存在であつたが、これは彼の属人的な要素が強く、「内大臣」の位置付けはまだ十分に明確化していなかつた。徳大寺内大臣時代になると、藩閥政府を統轄する元老達と、その元老達を調停する明治天皇との連絡役に役割が縮小し、それがある程度定着した。

(二) 桂内大臣の就任以降、首相奏薦への参画や御前会議への出席等、内大臣たる元老による元老としての政治活動を通じて、内大臣の活動の許容範囲が拡張され、元老が担つていた諸輔弼機関間の調整への関与が見られるようになった。また、枢相と共に統治権の総攬者たる天皇を輔佐し、「君側に重みを増す」重臣として重要視されるようになり、名実共に明治憲法体制の要として位置付けられるに至つた。この状況は元老に次ぐ実力者たる平田東助の在任中も(大山・松方程ではないにせよ)概ね同様であつた。

(三) 牧野内大臣の就任と前後して政党内閣制が定着すると、国家意思決定、即ち諸輔弼機関の調整は主として内閣が担うこととなり、内大臣はその役割を元老と共同での首相の奏薦、及び裁可者たる天皇の助言者へと特化させていった。田中内閣期においては、天皇が内閣に対する意思表示を比較的頻繁に試みたため、意思表示自体を諫止した場合も含め、御下問への奉答を通じて聖意の形成に牧野が及ぼした影響は大きな意味を持った(その極大

点が田中首相叱責事件である)。その後は天皇が府中への干渉に自制的になつたので、牧野及び彼の補佐者達が活発に動いた割には、内大臣の献策が国家意思に及ぼした影響は小さくなつたように思われる。

(四) 政党内閣の崩壊後も、内大臣による府中への直接の関与は再開されず、引続き天皇の助言者としての役割を担つていた。しかし、府中における人材の払底と、昭和天皇の政治的成長に伴ひ、統治権の総攬者としての天皇の地位が内実を伴つて来るに従つて、内大臣による「常侍輔弼」もその重要性を増していった。また、首相奏薦の主導権が元老から内大臣へ移つたことによつて、内大臣は首相の選定を通じて行政府にある程度の方向付けをなし得る存在となつた。天皇は個別の輔弼者に対しては再考を促すことがしばしばであつたが、国家意思の最終決定局面たる御前会議において意思表示をすることは少かつた。従つて、「常侍輔弼」が統一的な国家意思の決定に及ぼす影響は限定的であつた。しかし、戦中における木戸内大臣は、外部から天皇への情報供給を管理することで、裁可者たる天皇と当局者との対話(御下問)や、当局者、特に内閣への天皇の支持不支持に影響を及ぼし得たのであつて、その意味でも、当該期の内大臣は、統治権の総攬者たる天皇と、国政運営の中心を担う内閣との関係を左右し得る重要な位置にあつたのである。また、昭和二〇年(一九四五)六月に最高戦争指導会議構成員の御前懇談会が開催される過程、及び同年八月の聖断による終戦の決定過程においては、天皇と意を通じた木戸の水面下での調整が大きな役割を果していた。

と纏めることが出来よう。

中世後期のカステイリーリヤ・グラナダ間における戦争と平和

——「境域(frontera)」からみる異教徒間交渉の実像——

黒田 祐我

中世の地中海域では、西のラテン・キリスト教世界すなわち西欧世界、東のビザンツ世界、そして南のイスラーム世界という、信仰を異にする文明世界が並存して重なり合うかたちで戦争と平和が複雑に展開された。また、三大啓示宗教としてのキリスト教、ユダヤ教そしてイスラームそれぞれの信徒が、顔をつき合わせて生活する空間でもあり、彼らが互いに行き来するこの地中海域の最西端にイベリア半島が位置していた。半島の南にはイスラームを奉ずるアンダルスすなわちイスラーム・スペインが地歩を占め、かたや北にはキリスト教を奉ずるキリスト教諸国が割拠して、この両者の間で「レコンキスタ」と総称される政治・軍事的な衝突が繰り返される舞台となった。中世イベリア半島で並存するこの二つの文明世界は異なる信仰と文化を保持しつつ、「レコンキスタ」あるいは十字軍や聖戦の名のもとで、宗教的、政治軍事的そして社会的な衝突を繰り返したことは事実である。しかし同時に両文明世界をまたいで融和と和合が生じたことも否定できない。

この二つの両極端な歴史的事実をどのように整合して理解すべきであるのか。中世スペインの歴史の解釈をめぐるこれまで多くの議論がなされ、それは今なお継続している。彼らの評価の差異を敢えて単純化するとすれば、各々の信仰あるいは社会構造の絶対的な相違を重視し、文明世界間の

不可避な対立と軋轢を重視する見解（不寛容の強調）、あるいは逆に、上記の相違を越えた形で展開されていく文明世界間の融合を強調する主張（寛容の強調）へと二分することができよう。しかし、このような「寛容かあるいは不寛容か」という二者択一的な歴史像は、当時のイベリア半島ひいては地中海域のダイナミズムを的確に表現しているといえるのか。もし的確ではないとすれば、異なる文明世界が接触する場に成立する社会は、どのような姿をみせていくのか。そこでは信仰の相違がどのような影響をもたらしのか。これらの素朴な問いが、本論文を執筆するにあたっての出発点となった。

上記の問いに実証的なかたちで答えるために、本論文は大きくわけて三部構成をとった。序論『レコンキスタ』の歴史から『境域』史へ』では、中世カステイリーリヤ王国史に対象を限定し、同王国の「国是」をなした「レコンキスタ」概念の変遷と近現代における解釈を整理したうえで、その問題点を明らかにした。

軍事的な征服運動が大きく進展した中世盛期（11世紀から13世紀前半）を対象とする研究が逆説的に宗教的な「寛容」を強調するのに対して、中世後期（13世紀後半から15世紀末）研究では、この時代に他者への「不寛容」が醸成されていったと解釈される。それでは実際にイスラーム世界の最西端を占めるアンダルスと接触する最前線地帯、すなわち「境域(frontera)」でも、このような大枠の図式が適用されるのか。このような問題提起を行なったうえで、史料・研究ともに膨大な蓄積をみせている中世後期のカステイリーリヤ王国とアンダルス最後の砦としてのナスル朝グラナダ王国との間に横たわる「境域」に関する研究の現況を整理した。

以降の本論は、二部構成をとる。中世後期のカステイリーリヤ・グラナダ

関係を総合的に分析するために、「中心」と「境域」という二つの重なりつつも異なる視角を用いた。

第一部「中世後期におけるカステイリヤ王国・グラナダ王国間関係〔1246-1492〕」では、伝統的なカステイリヤ王国政治史と「境域」地域史との接合を試みた。つまりは「境域」情勢に目を配りつつ、その意義を両王国間の関係史という、よりマクロな次元、すなわち両王国の宮廷から構成される「中心」同士の関係分析に生かすことを試みた。両王国間の関係を分析するにあたって、これまでの諸研究にみられてきた「戦争かあるいは平和か」という二者択一的な論議の把握から始め、この上で当時の戦争の実態、平和の実態をそれぞれ分析し、さらに戦争と平和の連関性を検討していった。

なるほど確かに、カステイリヤ王国とナスル朝グラナダ王国との間には休戦協定が頻繁に締結され、それが更新されていた。一見すると両王国間の関係で平和が優位を占めていたように思われる。しかし、この点で第一に指摘すべきは、カステイリヤ王国とグラナダ王国との間に締結されていた休戦協定が、決して安定的な関係を構築するものとなりえなかった点である。それは両王国間関係における平和の優位を単純に象徴するものとはならず、むしろ状況に応じてその都度の両者の熾烈の交渉を経た、「水面下の戦争」に過ぎなかった。この証左として、それぞれの王国を取り巻く状況如何によって休戦期間のみならず、グラナダ王の臣従規定や貢納金徴収、そして交易の条項に大きな変動が生じている。ゆえに、カステイリヤ・グラナダ「境域」での平和関係は表面的なものに過ぎず、両王国間の、そして両王国を取巻く西欧世界あるいはイスラーム世界のマクロな政治情勢と深く関連しつつ、その中でしばしば選択された結果にすぎなかったと考えられる。両王国間の休戦協定の締結とその更新の水面下で、戦争

と平和が密接に連関する形で両王国間関係は成立していた。カステイリヤ王の側は、将来的に戦争行為を再開することを常に念頭に置いていたのである。人員の徴集力、兵站の確保、軍事技術といったあらゆる面における制度の未発達ゆえに、中世における戦争とは長期間にわたって大規模に実施できるものではなかった。また実施できたにせよ、その成功は保証されておらず、ゆえに当時の為政者らは大規模な戦争を慎重に計画していく。カステイリヤ王は状況に応じて臨機応変に対応できるように、なるべく短期間の休戦を望み、また最大限の経済的搾取をグラナダ王に強制することで間接的に疲弊させようと試みる。このように実際の戦争行為と休戦協定の締結とが相反する現象であったとはいえない。

第二に、上記の連関する「戦争と平和」という視角からみた場合、約250年間にわたる両王国間の関係はほぼ二分できる。第一期は1350年頃までとなる。この時期は「海峡戦争 (Batalla del Estrecho)」という国際的な合従連衡の最中、カステイリヤ王もまた対グラナダ関係を重要視していた。王が自ら戦争を率いてグラナダ王を臣従下に取り込もうと試み、11世紀末からイベリア半島情勢へ幾度にもわたって軍事力を提供し続けてきた海峡対岸のマグリブからの介入に終止符を打った。グラナダ王国が孤立し、トラスタマラ王朝へカステイリヤ王権が交代することで始まる第二期においては、しかしながら逆説的に、カステイリヤ王は国内外で頻発する諸問題に対処せざるをえず、他方のグラナダ王国はムハンマド五世の長期にわたる治世のもとで最盛期を謳歌する。休戦協定の締結状況からみた第二期の最初の約50年間 (1350-1406) は、連続的な休戦協定の更新で彩られている。しかし15世紀初頭から貢納金の徴収が再開されるとともに、捕虜返還義務が付加され始める。それでもなお対グラナダ情勢に専念しえないカステイリヤ諸王は、休戦協定を介したグラナダの漸進的衰退と不安定化を狙いつつ、グラナダへの直接関与、すなわち戦争の

機会を虎視眈々と窺っていた。

このようにグラナダ王国内に疲弊と分断を引き起こすカスティーリヤ王のしたたかな政策は、最後の「グラナダ戦争（1482-1492）」においても遺憾なく発揮された。ムハンマド十一世を懐柔し臣従させつつ内乱を引き起こさせ、グラナダ王国の各拠点を「寛容」な協定を通じて個別に勢力下へと併合していく。ゆえに、カスティーリヤ王宮廷のとの対アンダルス政策は、中世盛期と中世後期を通じて驚くほど酷似していたとすべきであろう。大規模な戦争行為を実施しえない王権は、11世紀において「パリア制」という一種の異宗教間での同盟関係を探ることで、漸進的なタィファ諸王国の衰退を目論み、トレード征服（1085年）へと結実させることができた。状況は12世紀においても、そして「大レコンキスタ」が推進される13世紀前半においても同様といえる。アンダルスに対する戦争は、序論で分析したように「西ゴート王国の篡奪者」たるイスラーム勢力に対して正当化された戦争という意味で正戦であり、なおかつ相手が異教徒でもあることから、後に聖戦へと変容していった。しかしこれはアンダルスの政治的な服属、つまりは臣従下に置くことを目標とする現実的なものでもあり、戦争遂行の限界を示しつつ常に一定の「共存」への可能性の扉を同時に開いていく。最終目標をアンダルスの併合に置きつつ、中世盛期から首尾一貫した戦争と「外交」をアンダルスに行使し続けたカスティーリヤ王の目標は、あくまでその政治的併合にあった。15世紀の末に突如として状況が一変するまで、中世を通じて臣従、降伏協定を介したムスリムの残留は、別段大きな問題を引き起こすこともなかった。このような中世スペインの歴史は「寛容か不寛容か」あるいは「戦争か平和か」という単純な二項対立的な図式では把握できないものである点を、いま一度確認した。

しかし第三に、戦争と「外交」手段を駆使することによる「レコンキス

タ」の完遂という、首尾一貫したカスティーリヤ王権の大義の実現のためには、「境域」の民の介在が不可欠とならざるをえない。グラナダ王国に関する最新情報がいち早くもたらされる「境域」が「外交」交渉に必要な人材を揃え、「境域」の有力者が、王権になりかわって折衝を行ない始めるのは当然の流れといえる。14世紀後半以降、トラスタマラ系の諸王が「境域」統治に関心を抱かなくなるのに伴い、カスティーリヤ王国とグラナダ王国との休戦協定の交渉を実際に担当していくのは、「境域」社会を統べる大貴族層となった。そして「境域」社会が、自身の思惑をもって個別交渉にあたっていくのも必然であった。

中世盛期から首尾一貫した政策をアンダルスに行使し続けようとした「中心」としてのカスティーリヤ王権の思惑は、当の「境域」社会で、どのように受容されていくのであろうか。言い換えるならば、「中心」同士で成立した王国間休戦協定の存在にもかかわらず、日常的な越境暴力に晒され、しかしこの侵犯行為を抑止させるために独自のイニシアチヴで対岸と「対話」を欠かすことのなかった「境域」社会は、いかなる動きをみせていくのであろうか。

第二部「境域」における「戦争と平和」では、視座を中世後期のカスティーリヤグラナダ「境域」自体に定め、よりミクロな次元、すなわち両王国の境界域同士の関係を分析した。地域史研究における二元性論議は形を変えながらも、やはり「戦争かあるいは平和か」で推移してきており、それは「戦争遂行型社会」か、あるいは「平和維持型社会」という「境域」社会論の対立という形をとっている。まずはこの両社会論がこれまで明らかにしてきた諸特質を実際の史料を引用して分析しなおし、その上で各々の特質同士の連関性を、越境交渉の個別具体的な事例から指摘していった。

確かに「境域」では越境暴力が日常的に頻発していた。しかし「境域」住民は、王国間休戦協定を維持させ、頻発する越境暴力が負の連鎖を引き起こすことを同時に阻止しようとした。これらの諸特質は常に同時に存在し、かつ連関していたのではないかとの仮説をまず提示した。というのも「境域」における生活は、必然的に巻き込まれざるをえない危険によって、生き残りのため必然的に「寛容」とならざるをえないものであったのではなかろうか。

「境域」は、王国間休戦の履行にもかかわらず、そしてこの休戦状態が長期間にわたって維持されたにもかかわらず、日常的に越境暴力が繰り返される場となった。社会の隅々に至るまでが王国国境域の防備を目的として形成されていた当該地域では、当然ながら常なる防備を担い、必要の際に略奪遠征を実施できる者が支配層を形成していた。しかしこの越境暴力の担い手は、同時にその管理者ともなる。カステイリヤのトラスタマラ王権が「レコンキスタ」に直接関与しなくなる14世紀後半以後、日々境の向こう側との駆け引きを経験していた「境域」の大貴族層が、王国間休戦協定の実際の交渉で主導権を発揮していくのも当然の流れといえる。セビーリヤをはじめとする大都市、より前線に位置する中小都市の寡頭層を形成する中小貴族層もまた、大貴族の代理として、もしくは自らの主導で、王国間休戦の維持に尽力する。王国間休戦協定をより確固なものとして、あるいは協定の不在時の和平を保障するために、「境域」は局地的で小規模な和平協約を取り交わす。彼らは戦争の主役でもあり、また和平の維持者としても活躍する両義的な存在であった。

本論文の第一部で分析したように、カステイリヤ王権は、徹頭徹尾ナスル朝の漸進的な衰退を目論み、最終的に併合することにあつた。9世紀から維持された「レコンキスタ」概念を大義名分とする王権にとって、イベリア半島の一部を不当に領有するナスル朝の永続は決して容認できるも

のではなかった。しかし14世紀の後半にトラスタマラ王朝へ王権が交代した後、「境域」社会は「中心」たる王権から逸脱していった。「中央」同士
の折衝で成立する王国間休戦協定、あるいは公的な戦争と並行して、個別に成熟をみせる「境域」社会は、軍事を専らの生業として台頭してきた在地貴族層の主導の下で、独自の和戦をグラナダ側と展開していった。

「境域」社会が独自に展開する「外交」は、休戦にもかかわらず頻発する不法な暴力を解決するために維持せざるをえないものとなる。やはりそれは、決して恒久的な平和を構築することを意図するものではなかった。境を越えて往復された書簡の文言は、しばしば相互の友好を強調するものの、報復をちらつかせて脅迫めいたものといえる。しかし彼らは共通して、休戦関係の全面的な破棄と続く戦争状態から生じてくる危険を恐れて、また略奪の応酬が繰り返されることで被る多大な損害を回避しようとした。彼らは繰り返される交渉の中で、互いに容認しうる諸慣習を共有し、和平を各々の地域的利害を軸に維持しようとする。「境域」民にとって境を接するナスル朝領域とは、「中心」が考えるような征服すべき領土というよりもむしろ、日々の和戦を通じて互いに平衡状態を維持していくべき相手であった。ゆえに「境域」にとっての対グラナダ関係とは、局地的な暴力の応酬を行ない、かつ、この暴力の不必要な連鎖を食い止めることに尽きる。

まとめるならばカステイリヤ・グラナダ「境域」社会とは、越境して暴力を行使しつつも、これを統制し抑止するための枠組みを備えるため、必然的に宗教の境を越えた「対話」が必要不可欠となる場であった。このような社会では、戦争と平和が分かちがたく結びつき、暴力の優勢と共存の希求とが並存して複合していく。しかしこれらの諸要素が同等の強さで作用を及ぼすために、水面下において大きなダイナミズムを含みつつも約250年間にわたる期間、さほど大きな動乱に見舞われることもなく、表

面上において静態的な状態を維持することができた。

本論文で扱ってきた中世後期カステイリヤ王国における「中心」と「境域」という二つの分析視角を統合することで明らかとなった結論は以下の通りとなった。それは、「中心」と「境域」とが関連しつつも、前者と後者との間に、ある隔絶が生じていくことである。「中心」と「境域」との乖離が、14世紀半ばから後半にかけて生じていることは間違いない。

「中心」という次元において、「海峡戦争」で勝利を収めたカステイリヤ王は、しかし英仏百年戦争に巻き込まれる形で国内外の状況への対処に忙殺された。その一方でナスル朝グラナダ王は、「海峡戦争」での敗北によって制海権を喪失し、11世紀から維持されてきたマグリブとの接触を大幅に制限されて、イスラーム世界からの孤立を余儀なくされた。しかし、このような大局的な歴史の動向は、「境域」で別の局面を準備することになった。国内の政治的再編と西欧諸王国との「外交」に忙殺されるカステイリヤ王権は、「境域」情勢へ直接的な関与をしなくなり、ナスル朝君主と休戦協定を更新することで満足した。「海峡戦争」時には、カステイリヤ王国とともに複雑を極める合従連衡の主役を務めたアラゴン連合王国、ポルトガル王国、ジェノヴァや、マグリブ・イフリーキヤのイスラーム諸王朝も、カステイリヤ・グラナダ「境域」への関与に突如として消極的となる。「国際社会」から忘却されてしまったこの「境域」は、自らの力でもってなんとか和戦を維持しようとする。グラナダは国際的な孤立を深めるばかりか、その君主は自らの「中心」としての求心力を自国内で喪失し、地域単位でもってカステイリヤ側の「境域」とのミクロな交渉を個別に繰り返していかざるをえなくなった。いうなれば、孤立し分断され、忘却された場同士が局地的に折衝を積み重ねていく中で「境域」の住民は、「中心」から逸脱した固有のダイナミズムを内包する社会を形成していった。

この社会は和戦の平衡状態をこそ、互いの生存のための条件とした。彼らは互いに相手方を、宗教と文化の相違から生じてくる敵意や憎悪の対象としてではなく、暴力を応酬しつつ、しかし暴力の全面的な連鎖と拡大を互いに食い止めていくべき交渉相手と見なしていた。なぜなら、どちらも孤立した「境域」として「中心」から忘却されてしまった以上、相手方を圧倒しうる宗教的、あるいは世俗的な征服動機も、軍事的な力も持ち合わせていなかったからである。

「境域」社会は、15世紀の末まで平衡状態を維持しようとしていた。しかし唯一残っていた「中心」たるカステイリヤ王権は、イサベル女王のもとで夫のアラゴン王との共同統治を開始し、最後の懸念であったポルトガル王国との軋轢を解決して国内外の問題を一掃した時、その牙を「境域」に突如として向けた。カステイリヤ王権は「レコンキスタ」の完遂を「国是」として保持し続けていたものの、内外の諸情勢がその全面的な遂行を不可能としていたにすぎない。コンスタンティノープルが陥落し、西欧世界全体の対異教徒認識が徐々に変化していた15世紀後半の潮流が、イベリア半島を取り巻く情勢の変化と複合的に絡み合って、最後の「グラナダ戦争」が開始された。1481年末に生じたグラナダ側からの休戦協定違反による領域侵犯を好機と捉えたカトリック両王は開戦を決断し、「境域」も否応なくこれに巻き込まれていった。孤立した「境域」で長きにわたって個別に繰り返されてきた和戦は、「中心」の突然の大規模な介入により、その展開の余地を喪失してしまった。中世後期のイベリア半島の歴史をより大きな視野から再度眺めてみるならば、興味深い事実が浮かび上がってくる。中世後期のラテン・キリスト教世界とは、教皇権、皇帝権の失墜が誰の目にも明らかとなった時代である。権力的で有機的、かつゆるやかな連合体として中世盛期に確立したラテン・キリスト教世界は、宗教的、世俗的な求心力を失っていった。時期的に差があるとはいえ、この世界を

構成する諸王朝とその支配領域は、これらの権威を失った結果、個別の対応を迫られていく。それは英仏百年戦争として、またアヴィニオン教皇権の「失墜」と続く教会大分裂という形で表面化してくる。聖俗の両権威の失墜から再編までには、ちょうど中世後期全体を費やす必要があった。諸王国の再度の安定と教会権威の再興を経た15世紀末、再び西欧世界は活気を取り戻し、全西欧的な情勢が展開し始める。この巨視的な動向と、中世イベリア半島の歴史は深く関連しているのではないか。西欧世界は宗教的な権威、世俗的な権力の双方を再編させ、これと軌を一にするかたちでスペインでも新たな「中心」が誕生し、同時にこれは近世の幕開けを意味した。しかし逆の視点から見ると、中世後期に「中心」が再編に力を注いでいた時期、「境域」には独自の展開を遂げる余地が大きく残されていたとみなすこともできよう。

本論文の結論をまとめるならば第一に、「境域」では「戦争遂行型社会」と「平和維持型社会」という二つの相反する特質が同程度に作用を及ぼし連関しあつて、双方の特質の間で均衡がもたらされている社会が形成された。第二に、「境域」は「中心」から逸脱し、自立的な傾向を示す場であったと考えられる。

「境域」は「中心」から逸脱することで再生産されつづけていった。他の地域や時代に生成された辺境でも、本論文と同様の結論が導かれるのであれば、これまで「中心」からのみ描かれてきた歴史像は、大きく修正されていかなければならないであろう。

下毛野の首長と埴輪

——古墳時代地域形成過程の研究——

米澤 雅 美

序 章

古代日本において、日本全国の地域区分が明確に示されるようになったのは、律令制を導入し始めた飛鳥時代から本格施行に至った奈良時代にかけての頃である。国や郡の範囲は令制を布くにあたって全く新しく線引きをしたわけではなく、国造の支配領域など、既存の地域的まとまりを基にして決められたと考えられる。そのような地域的まとまりを考古学的な手がかりから検討することが本論の出発点である。研究対象の考古遺物として、次代につながる地域形成という背景を反映するような、政治的な首長層の動きを反映する物として、埴輪を題材とする。埴輪は原則、古墳に配列するためだけに作られるものであり、古墳築造当時の首長層の政治的な状況を反映しやすい遺物である。

研究対象地域には、古墳時代以降も重要な地点として注目できる現在の栃木県を設定する。現在の栃木県域はほぼ令制の下野国に相当する。下野国は畿内から東山道を通じてきて陸奥国へ向かう通り道であり、東北への最前線として律令制以前より大和王権にとって重要視すべき場所である。当地域の過程を見ていくことは古代日本の地域形成過程復原の一助となるであろう。

第1章 塚山系円筒埴輪にみる古墳時代中期の首長

本章では、これまで一つの系統とされてきた埴輪を改めて検討することにより古墳時代中期から後期初頭にかけての地域相を明らかにした。第1節ではこれまで塚山系埴輪とされてきた埴輪のうち特に円筒埴輪について、製作技法の連続性を中心に、系譜関係の再検討を行った。その結果、塚山系円筒埴輪が導入された第1段階、定着する第2段階は直接継続する系譜と言える。続く第3段階は、全国的に共通する新しい埴輪の序列関係を摩利支天塚古墳がもたらし、塚山系円筒埴輪を用いる首長層がそのまま取り込まれたことが分かった。第4段階は琵琶塚古墳の築造に伴って、埴輪生産体制の再編成が行われ、塚山系埴輪の系譜が解体されたことが分かった。第2節では、塚山系円筒埴輪の第1段階である塚山古墳、第2段階にあたる塚山西古墳の埴輪同工品分析を行った。両古墳に共通する製作者の存在を明らかにし、第1節で確認した系譜関係をさらに実証的に裏付けることができた。

第3節では、塚山系円筒埴輪の祖型を検討した。塚山系円筒埴輪のうち、外面調整が一次タテハケ調整だけの埴輪について、器形、突帯間隔、透孔の穿孔位置、線刻の位置といった特徴が大阪府の生駒山西麓の埴輪に似ており、古市古墳群とその周辺の情報に基づいて製作された埴輪であるとした。外面調整にB種ヨコハケ調整を持つ埴輪は、全国的に同じ規格、製作技法で作られるため、直接影響を与えた地域を明らかにすることができなかった。それは該当時期に畿内から各地へ一斉に情報がもたらされ、塚山系円筒埴輪にもその流れが到達していることを示している。

第4節では、第3節までに検討した結果を受けて、塚山系円筒埴輪を持つ古墳を中心に、大規模前方後円墳と古式群集墳の関係から、古墳時代中期における下毛野地域の首長層の関係を検討した。塚山系円筒埴輪では古

墳の規模と配置される塚山系円筒埴輪の大きさが比例する、埴輪による階層性の明示が行われていることが分かった。群集墳を構成する中・小古墳の首長は、時期毎に地域最大の首長の傘下に入った。塚山古墳群の首長の傘下に入った中・小首長の古墳は塚山系円筒埴輪を持つ。しかし群集墳の中で次代に継続して塚山系円筒埴輪が配置されている事例はないので、大規模首長と中・小規模首長の関係性は一代ごとの一対一の関係であった。また、塚山古墳群では埴輪棺が多用されているおり、埴輪棺も含めた古墳の秩序が一つのパッケージになった形で塚山古墳群に導入されたのである。

以上の塚山系円筒埴輪の検討から復原できる地域の変遷は、この時期の下毛野では中心となる大首長がいて、中・小首長へ影響を及ぼしているものの、各支配領域を合わせた大きな地域的まとまりは一代限りであったことを示している。次の摩利支天塚古墳を通してもたらされた新しい序列は大和王権が地域の大首長と中・小首長との関係を一齐に序列化した体制で、このときには一定の領域が形成されたのではないだろうか。従来は摩利支天塚古墳、琵琶塚古墳の出現をもって下毛野の地域的統合が進んだとみられてきた。確かに、前代よりもさらに大規模な古墳を造営する多大な労力を動員するには、それに見合っただけの支配領域があつてしかるべきである。しかし、その領域も琵琶塚古墳の段階には不明瞭になってしまふ。それが塚山系埴輪の解体という形で現れている。この時期には後の下野国という地域区分に継続するような明確な動きはまだ認められないのである。

第2章 下毛野南部の首長と寒川古墳群の埴輪

本章では喜沢古墳群と寒川古墳群の円筒埴輪の比較検討をもとに、両古墳群は古墳時代中期から存続する古墳群でありながら、塚山系円筒埴輪が

供給されていないことを明らかにした。当該期に塚山系円筒埴輪をもつ古墳は、笹塚古墳と塚山古墳、その下位に連なる古墳であり、下毛野では当時最大の勢力であったと言える。寒川古墳群から西方約3.5kmに位置する宮内2号墳には塚山系円筒埴輪が供給されていることを踏まえれば、喜沢古墳群と寒川古墳群は距離的条件では供給可能範囲内である。

しかし、喜沢古墳群の盟主墳である桑57号墳は豊富な副葬品を持つていて、大和王権との特別なつながりを示している。埴頂部には木棺直葬の主体部、その周囲には方形埴輪列を持つ。葺石も持ち、畿内の墓制を取り入れて築造されている。また、思川と姿川の合流点近くに所在し、交通の要衝を押さえた立地と言える。寒川古墳群でも同様に、巴波川沿いの地域は湧水が多いことが指摘されており、現在でも肥沃な水田地帯である。さらに、律令制施行後は寒川郡となる地域であり、まさに交通と生産・生活の要衝を押さえた立地である。以上のように、埴輪祭祀導入期の喜沢古墳群と寒川古墳群の首長は独自の勢力圏を持ち、塚山系円筒埴輪とは異なるルートで埴輪を導入した。

このような様相は、当地域における首長層と大和王権との重層的な関係を反映している。つまり、古墳時代中期の下毛野の首長層は笹塚古墳・塚山古墳群が頂点であることは動かしがたいが、桑57号墳、茶臼塚古墳のような大和王権と直接的な関係をもつ首長も存在するという重層的な構造であった。

寒川古墳群では各時期の盟主的な位置付けができる古墳に異なる系譜の埴輪が配置されていたことがわかった。寒川古墳群は鶴巻山古墳の築造を契機として形成される古墳群である。鶴巻山古墳は径53mの大型円墳で、葺石を持つことがわかつていて。埴輪はなくとも、畿内的な古墳の築造規範に沿って造られた古墳であり、出土した土師器の年代を基に築造時期は5世紀中葉で茶臼塚古墳にやや先行する時期が与えられる。鶴巻山古墳、

茶臼塚古墳とはほぼ同じ頃に築造されている塚山古墳群は塚山古墳、塚山西古墳、塚山南古墳と3代続けて大型古墳が築造されている。寒川古墳群では鶴巻山古墳、茶臼塚古墳の築造時期は近いと考えられるが、後の毘沙門山古墳、三味線塚古墳の築造時期とは近接しておらず、埴輪の系譜も断絶する。寒川古墳群の首長勢力が、茶臼塚古墳築造後に一度弱まるのである。

塚山古墳群で最後の盟主墳である塚山南古墳が築造される頃、これまで大型古墳が築造されてこなかった地域に摩利支天塚古墳が築造される。摩利支天塚古墳の出現は埼玉県埼玉稲荷山古墳や群馬県井出二子山古墳などと並び、大和王権との関わりが指摘されている。ちょうどその頃、寒川古墳群でも大型古墳は築造されていない。新しい序列秩序をもった太首長が現れることで、地域首長層に大きな変化が起きており、大和王権と地域首長の全国的な関係の変化に、地域の中小首長層も連動して変化していたことを示している。この重層性のために、下毛野地域全体の統合が進まなかったと考えられよう。

第3章 下毛野における埴輪供給体制の変化

本章では古墳時代後期における下毛野地域の埴輪供給体制の変遷を検討した。第1節では近隣地域での埴輪生産に関する研究史を概観し、下毛野の研究状況と比較した。近隣地域では古墳時代中期末から後期初頭にかけて地域内の拠点となる埴輪生産窯が存在していることが分かっているが、下毛野では様相が分かっている。ない。

第2節では塚山系埴輪の製作者集団が解体された後の埴輪として、琵琶塚古墳と时期的に近接すると考えられる御蔵山古墳、上神主狐塚古墳の埴輪について検討した。琵琶塚古墳が造営された頃の6世紀前半、下毛野地域には地域の中心となる拠点の埴輪窯が存在していなかった可能性が高い

ことが分かった。

第3節では古墳時代後期後葉の埴輪供給状況を確認するため、埴輪窯と大型首長墓の埴輪について検討した。下毛野地域で発見されている埴輪窯跡は唐沢山埴輪窯跡と飯塚埴輪窯跡だけである。唐沢山埴輪窯跡出土の埴輪について特徴を整理し、研究史も踏まえながら類似した埴輪の分布を確認した結果、唐沢山埴輪窯は拠点の埴輪窯として広域供給を行っていたと考えられる。飯塚埴輪窯跡は古くより吾妻古墳の埴輪と類似が指摘されてきたが、ここでも特徴を比較検討した結果、吾妻古墳の埴輪は飯塚埴輪窯産で間違いなく確認した。唐沢山埴輪窯と飯塚埴輪窯は波状文の共通性により、関係のある製作者集団による埴輪窯であると考えられ、飯塚埴輪窯は吾妻古墳の造営にあたって特別に操業を行った埴輪窯であろう。このような拠点の埴輪窯を中心として、衛星的埴輪窯があるという形は群馬県の本郷・猿田埴輪窯、埼玉県の出塚・桜山・馬室・権現坂埴輪窯に見られるような埴輪窯同士の関係と同じかもしれない。

また、後の下毛野国造を生んだ下毛野中心部における大型首長墓の埴輪として、吾妻古墳以外に富士山古墳、甲塚古墳の埴輪を検討した。この2古墳においても埴輪の製作技法では唐沢山埴輪窯との強い関係が認められている研究史もあるが、埴輪使用の面においても共通性が認められるのである。しかし、胎土の違いがあり、全てが唐沢山埴輪窯から直接供給された物とは言いがたい状態である。反対に、小規模首長墓として足尾塚古墳の埴輪を確認した。やはり唐沢山埴輪窯と考えられる埴輪が出土している一方、常陸地域で生産された埴輪も供給されていた。下毛野地域中心部では唐沢山埴輪窯を中心として、古墳の規模と造営時の状況に合わせて供給体制が少しずつ異なっているということが分かった。そして、場合によっては後の下野国の領域よりも広い地域から供給されていたのである。

第4節ではさらに地域を限定した形で埴輪の供給状況を確認するために、飯塚古墳群の埴輪を分析した。飯塚古墳群では6世紀前葉から後葉にかけて埴輪を配置する古墳が造営された。古墳の造営は関東地方各地と共通する古墳祭式を取り入れて融合させた姿で行われていた。古墳群で出土した埴輪は胎土の特徴で3類に分類でき、古墳によって用いられている埴輪の様相が異なっていた。特に、31号墳の人物埴輪は群馬県東部の製作技法で作られた埴輪である。44号墳の人物埴輪や形象埴輪は唐沢山埴輪窯の特徴を備えている。44号墳は円筒埴輪の形態では須恵器「ハニヤ」型式期に位置づけられる。そして、その両古墳の埴輪は製作技法だけではなく、胎土も異なっていた。このことにより唐沢山埴輪窯からの供給は「ハニヤ」型式期頃に始まったと考えられる。同時に、飯塚古墳群には常陸や下総からも埴輪が供給されていた。こうして、下毛野地域内での埴輪供給の変化と隣接地域との繋がりを示すことができた。飯塚古墳群と合わせて、時期的に併行する寒川古墳群の横塚山三味線塚古墳の埴輪も検討した。三味線塚古墳においても飯塚古墳群と同じ胎土が2種類認められ、寒川地域でも唐沢山埴輪窯を中心とした下毛野地域の埴輪供給体制がとられていたことが分かった。このように、下毛野地域では古墳時代後期後半に至って、唐沢山埴輪窯産埴輪に見られる一元的な生産供給体制が備わった。このような埴輪生産の状況は、隣接地域の埴輪生産体制と異なっており、その背景には下毛野中心地域の大首长層の動向がある。「下野型古墳」の首長は各自の支配領域を保ちながらも、各自の領域を超えて地域的に統合していた。このまともりは緩やかな形で、埴輪の特徴が一律でないところにも統合の緩やかさが現れている。その統合範囲は前代の塚山系埴輪の分布範囲を超えており、しかもその範囲が数世代にわたって継続している。ここで初めて、後の下野国の元となる地域が形成されてきたのである。下毛野地域が形成されたといってもそれは閉鎖的な地域が生まれたわけではない。埴輪に他地域か

らの影響が認められたように、常に他地域との交流がもたれていたのである。

同様な地域的統合が古墳時代後半には他地域においても認められている。例えば上総、下総地域では、6世紀後葉に従来の地域圏を越えた範囲で横穴式石室の石材、副葬品の馬具、土師器の分布状況に変化が起きており、地域圏の再編が行われているという指摘がある。こうした動きが時期を違えながらも関東地方各地で起きているのは、関東地方が大和王権による対東北政策の軍事的基盤として重要な地域であったという背景があったからであろう。こうして後につながる地域区分が成立していくのである。

第4章 鬼怒川を挟んだ東西の埴輪

本章では、下毛野地域の形成が鬼怒川を越えた東側でも認められるのかを確認するため、芳賀地域の埴輪を検証した。第1節では研究史から本章の課題を整理した。第2節では亀山大塚古墳を中心に、埴輪の系譜を考えた。亀山大塚古墳の人物埴輪は、製作技法は飯塚31号墳と同じ上毛野東部の系譜であった。胎土は筑波山地周辺の生産地から供給された可能性がある。

亀山大塚古墳が位置する鬼怒川と小貝川流域には、筑波山地周辺の生産地から供給されたと考えられる埴輪が分布しており、鬼怒川、小貝川の下流である香取海地域との地域間交流が認められた。この地域は東西南北の地域間交流の影響を強く受けた中で埴輪が作られていたことが指摘できた。

第3節ではさらに東側、小貝川を越えた事例として益子天王塚古墳の埴輪を検討した。形象埴輪が豊富で、器種組成も鬼怒川の西側と共通していることが分かった。円筒埴輪は底部の伸長化や底部調整が見られず、他地域に比べて古い様相を残した特徴を持っている。また、益子町内の円筒埴輪との比較により、地域内で系譜の追うことができる円筒埴輪であること

が分かった。こうした状況を考えると天王塚古墳の埴輪は、鬼怒川以西地域からの影響を受けながらも独立した地元製の製作者集団によって製作されたのであろう。鬼怒川の西側との関係については益子町だけでなく、矢板市境林古墳の様相からも、都賀、河内、芳賀の北方に位置する塩屋地域においても同じように形象埴輪が豊富であることが分かった。

第4節では鬼怒川以東の円筒埴輪について編年の位置づけを行った。埴輪は大小二つのタイプに分けられ、その中でも胎土の違いにより芳賀地域で作られた埴輪と筑波山地周辺と関係が深い埴輪とに分けられる。しかし、大小それぞれのタイプ内で器形や突帯間隔が共通しており、埴輪の生産地が異なっても同じ規格を使って製作され続けていたようである。このような鬼怒川以東における円筒埴輪の変遷は鬼怒川以西の複雑な変遷とは異なっている。

以上の検討から、古墳時代中期末の鬼怒川以東では、臨時に集められた埴輪製作集団が古墳が造られた地元で埴輪生産を行っていたが、後期に入ると他地域からの影響が多数入ってきていたことが分かった。形象埴輪では後期前葉には鬼怒川以西との関係が強く見て取れた。同時に常陸地域からも埴輪の供給を受けており、後の下野国を超えた範囲で東西南北の地域間交流が行われていたことが分かった。ただし、常陸地域から供給されたと考えられる埴輪の基本的な製作規範が、鬼怒川以西や芳賀地域産と考えられる埴輪と共通しているということは、芳賀地域の首長層が常陸地域に組み込まれていたとは考えられない。むしろ、形象埴輪の特徴では鬼怒川以西との繋がりが強いと考えられる。亀山大塚古墳の年代によれば、鬼怒川以西の下毛野中心部で地域的統合が始まる頃から強い関係性が窺えるようになる。こうして、後の下野国につながる下毛野の範囲として芳賀地域、塩谷地域も加わることになるのである。

第5章 結論

本章では第1章から第4章までに検討してきた結果を再整理し、下毛野地域における地域形成過程について以下のような結論を導き出した。

古墳時代中期、下毛野には突如広域的な領域を地盤とした大首長が現れた。河内地域の大首長は畿内の大和王権と直接的な関係を構築し、畿内の古墳築造規範を導入した。しかしその首長が地域の最大勢力であった時期は一代限りであり、次代の大首長権は異なる系譜の首長に受け継がれた。大首長は地域内の中・小首長に影響力を持ち、その影響力は一定の領域に渡っていた。しかしその関係も大首長個人と中・小首長個人の一代毎の関係であり、領域の形成は点と線で行うだけであった。そのため領域も、大首長と中・小首長が代替わりをする都度、変わっていったと考えられる。さらに領域の外には大和王権と直接的な関係をもつ首長も存在していた。下毛野地域内での首長層の支配領域は重層的であった。古墳時代中期末になって都賀地域を中心として新しい序列関係に基づいた一定の領域が形成されたが、それも継続するものではなかった。つまり、この時期には後の下野国という地域区分につながるような、明確な政治的統合はまだ認められないのである。

古墳時代後期になっても前代から続く領域の不安定さが残っていたが、後期後半頃に都賀地域の大首長同士が政治的に結びつくようになる。首長層のそれぞれの支配領域は重層的ではあっても、この結びつきにより同じ規範に基づいた領域が統合されるのである。前代と異なっているのは、この統合が大首長同士の結びつきであること、一代限りではなく、数世代にわたって維持され続けることである。点と線であった領域形成が面的な広がりには拡大したと言えよう。また、大首長は畿内大和王権とのつながりだけでなく、近隣の上毛野や北武蔵とも密接に交流を持っており、下毛野

の変化は関東地方全体の変化とも連動していたのであろう。こうして都賀地域が下毛野地域の中心となっていくのである。

都賀地域の首長は同時に、鬼怒川を越えた東側の芳賀地域の首長とも結びつきをつくるようになる。芳賀地域は古墳時代前期から常陸地域との地域間交流を持っていたが、それは河川を通じた地理的条件から自然に発生した交流である。これを基盤とした芳賀地域首長としての領域も形成されていたはずであるが、その形は律令制下野国の地域区分とは異なっていただろう。その上に鬼怒川以西から新たな地域間交流が入ってくるのである。もちろん、以前からも日常的なレベルでの地域間交流は行われていただろう。しかしそれは埴輪に認められる地域間交流とは異なる交流である。ここで新たに始まった鬼怒川以西との関係は、地理的条件とは違う背景で生まれた関係である。序章で述べたように、古墳は墳丘形態、内部施設、そこで行われる祭祀に至るまで、極めて政治色の強い構築物である。古墳に配列するためだけに作られた埴輪は、製作当時Ⅱ古墳築造当時の首長層の政治的な状況を反映している。鬼怒川を挟んだ東西地域の統合は、首長層の政治的な動向に基づいて確立されたのである。

下毛野で埴輪祭祀が行われなくなった後も、都賀地域の大型首長墓を中心として下毛野地域の統合は安定的に維持されていく。この地域的統合を基盤として国造下毛野氏が現れ、後の下野国につながる下毛野の範囲ができあがっていくのである。

近代日本における対抗的世界像の生成

——菅野八郎・天理教・星野祭祀学のテキストを中心に——

佐野智規

本論文は、近代世界の内部において生産されながらも、近代世界とは異なる世界のあり方を記述するテキストについて、その分析方法と具体的な解釈を提示し、かつそれらのテキストが解釈困難なものとして了解されるメカニズムを、思想史的に論証したものである。

本論文の構成は、分析すべき対象の設定、分析の視座についての考察および具体的実践的な分析手法を提示した序章、第一章から第五章までの本論、および分析対象の特徴を総括的に考察した結論から構成されている。本論は内容上三つの部分に分けることができ、第一章では菅野八郎のテキストを、第二章から第四章までは一九・二〇世紀転換期の天理教にかかわるテキストを、第五章では星野輝興のテキストを、それぞれ序論で提示された分析手法を用いることによって分析し、新たな解釈を導出している。これらの分析作業によって、かつては解釈困難なものとして分析がなされていなかったテキストの内的論理と、それに規定された解釈困難さの機構が明らかになるとともに、分析手法の有効性が検証される。

序論はまず、解釈困難なテキストに着目し、このような解釈困難さが、原理的にはあらゆるテキストのうちにも観察し得ることを指摘する。解釈

困難なテキスト、あるいはテキストにおける解釈困難な細部は、一般的な思想史においては、さまざまな操作によって解釈から除外されている。場合によっては、解釈困難なテキストを解釈から除外したことすら忘却されている。解釈困難さを除外し忘却する操作とは、内在主義である。この内在主義は、テキストの書き手への内在を標榜するいつぼうで、テキストそのものの全的解釈を断念する。すなわち、書き手の意図や意識、社会的関係性、あるいは思想といった次元を仮構し、この次元によって解釈困難さを上書きするという操作によって、対象としてのテキストの書き手に内在し得た、そして書き手の意図や社会的関係性の歪像としてのテキストを十全に解釈し得たと結論するのが内在主義である。それは、テキストの解釈を書き手の考察によって代替する還元論であり、同時に書き手の属性をテキストの内容と見做す反映論である。内在主義の操作を正当化するのには、テキストの書き手を、テキストの読み手とはほぼ同様あるいはそれ以下の特性と能力をもった、単一の近代的個人だとみなす前提である。このような前提を内包した内在主義の操作は、解釈困難なテキストの解釈困難さの責任を、テキストの解釈者つまり読み手ではなく、テキストの生産者つまり書き手に帰する。すなわち、書き手における能力の欠如ゆえに、書き手の愚かしさがゆえに、あるいは書き手がみずからの意図や社会関係を十分に記述し得なかったがゆえに、テキストに解釈困難さが侵入してしまったのだ、と。したがって内在主義は、テキストの書き手への内在を目指すことによって、かえってテキストそのものを、特にその解釈困難さを捨象するし、その捨象を正当化してしまう。では、この内在主義の弊を回避しつつテキストを読むためには、どのような手法が必要なのか。またそのような手法によって解釈困難なテキストを読んだとき、どのような解釈が得られるのだろうか。さらに、内在主義によって捨象される解釈困難さを、テキストの構造から説明することは可能だろうか。これが本論文の取り組

むべき課題である。序論はつぎに、内在主義を回避してテキストを全的に読むための手法を紹介する。この手法として、近代性の歴史化、問いかけそのものの歴史化、分析の次元としての「手つき」、反復する諸概念の運動、非対称あるいは不均等な関係性、これら五項目が概説される。これらの手法は、本論における分析から抽象されたものである。本論文における作業の要点は、テキストを運動としてとらえ、運動として分析することにある。また本論文の方法の要点は、つねにテキストから出発すること、である。これらの操作によって、解釈困難なテキストが解釈可能なものとなり、テキストに対する全的な解釈の更新が遂行され得る。

第一章「鈍愚の潜勢力 菅野八郎のテキストにおける「愚」の問題」は、菅野八郎のテキストについての新たな解釈を提示する。八郎研究史は厚いけれども、しかしそのテキストはいぜんとして多くの解釈困難さに満ちている。多くの研究史は、テキストにしばしば登場するキイ概念を取り上げ、その概念の意味するところは何か、時間の経過、経験の深化とともにどのように意味が変化するか、あるいはしないか、それが八郎の現実的实践とどのような関係にあるか、などを考察していた。しかし研究史は、八郎のテキストにおける解釈困難な部分、具体的には八郎のテキストが固執していた「愚」をめぐる問題を、捨象している。テキストにおいて強烈な否定性として働く「愚」も、キイ概念分析として分析しうるのではないか。これがこの章の課題である。さてこの「愚」は、テキストの内的構成を攪乱するという運動性を持つ。それは八郎のテキストに繰り返し登場しながら、テキストじしんそれを排除しようとしていた。この解釈困難な「愚」が孕む問題を辿ることができれば、「八郎の思想」には還元できない、八郎のテキストじしんの運動性を、テキストから明らかにすることができると。本章は、テキストにおける「愚」の運動を、三つの時期に区分して考察する。

それぞれ、八丈島遠島以前、八丈島遠島以降、そして明治期である。それぞれの時期に、ある種の開闢説が対応しているが、この開闢説が、テキストを媒介とした事物の探求の様式を規定し、かつ「愚」の運動性を規定している。第一の時期において「愚」は、リテラシーの次元の問題である。表層の秩序をもって事物の秩序だと取り違える「愚」かなひとびとは、拙ない筆運びで整わない文章を書き記した八郎のテキストを、「愚」なるものとして疎略に扱ってしまう。第二の時期における陰陽説との邂逅は、開闢説の構造を変容させ、したがって事物の探求の様式と、「愚」のありかたをも変えた。陰陽説の開闢説は、いわば「陰陽は文字に先立つ」というテーゼによって、リテラシーの次元に付着した「愚」の問題を、その根本から解消する。けれども陰陽説という知的原理は、それが原理性を持つがゆえに「愚」の問題を別の位相へと転移させる。テキストは、原理を得てもなお、貧苦からは脱し得ないみずから自嘲する。さて第三の時期における近代知の登場は、陰陽説の原理それ自体を「愚」として否定する。テキストは、近代知が覇権を握っていることを認めながら、しかし陰陽説を放棄せず、また近代知の覇権を陰陽説の原理によって基礎づけることもしない。テキストは陰陽説そのものに新たな原理を導入することによって、近代知のいま・ここにおける覇権と、未来におけるその没落を論証する。したがってテキストはつぎのように示唆する。近代知からみれば「愚」であっても、それは近代知の不義にあらがう根源的な希望なのだ、と。以上が第一章の骨子である。

第二章・第三章・第四章では、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけての、天理教にかかわるテキストを分析する。第二章「予備的考察天理教研究に關わるテキストについて」は、つづく第三章・第四章共通の導入部である。それら各論において扱われる当該時期の天理教について、研究史テキスト

および当該時期に生産された歴史的テキストがどのような見解を表明していたのか、それらの見解を提示するにあたってどのようなテキストを、どのような方法によって解釈したかを確認し、それらの見解が総体として示唆するアポリアをどのように克服すべきか、解釈の方針を検討する。ここで得られた解釈の方針とは、つぎのようなものである。すなわち第一に、これら多様な諸見解の相違を、研究史テキストの書き手の思想や立場性などによって説明するのではなく、テキストそのもの、つまり研究史のテキストとその分析対象たる歴史的テキストから説明すること。また第二に、テキストをその外部にある実践に従属するものと前提せず、まずはテキストじしんの内的論理を明らかにし、そしてテキストじしんの実践的効果を考察すること。これらの二つの方針である。

第三章「恐るべき愚民たち 天理教批判テキストにみる啓蒙の不可能性」は、第二章の考察から得られた方針をもって、当該時期の天理教批判テキストの内的矛盾を考察する。批判テキストはただ単に、天理教に対する事実無根の誹謗中傷と、近代知への絶対的な信頼から来る民衆蔑視に満ちたものであるように見える。それがゆえに研究史は、テキスト作者たちの思想や立場性などにテキストの主張を還元することで、批判テキストの検討を捨象していた。しかし本章は、批判テキストから分析をはじめ。さて、批判テキストによれば、天理教は「愚民」によって構成されている。テキストの定義によれば「愚民」とは、正しいものとそうではないものの区別がつかないひとびと、なんらの悪意なく、正しくないものを正しいものとして取り違えてしまうひとびとのことだ。このような「愚民」は、近代啓蒙の進展とともにいずれは滅亡するが、しかし国家社会に対するその害悪を鑑みればただちに撲滅せねばならない、とテキストは説く。批判テキストはある種の解釈困難さを持つ。批判テキストの解釈困難さとは、テ

クストじしんが啓蒙と撲滅の対象として措定した「愚民」にその理路を翻弄され、テキストみずからが「愚民」の撲滅が不可能であることを論証し、そしてテキストを除くすべてに「愚民」としての特性を見いだしてしまうことにある。なぜそしてどのように、この論理的混乱が生じるのかを考察することが、本章の課題である。さて、批判テキストの論理的混乱の根源は愚性、つまり正しいものとそうではないものが弁別不可能だという「愚民」の特性に求められる。「愚民」はその愚性ゆえに、啓蒙を啓蒙として認識することができず、むしろ反啓蒙的な天理教を正しい啓蒙として受容する。さらに「愚民」は、善意によってその得たところのものを拡散するがゆえに、時間の経過とともに増殖することを、批判テキストは論証する。したがって「愚民」は、論理的にも歴史的にも、啓蒙不可能である。ではどのような実践を、「愚民」のそれだとテキストは見做すのか。批判テキストは、いくつかの定型的な挿話によって、天理教の愚なる実践を描写し批判する。これらの挿話は二通りに解釈が可能である。すなわち、性的・経済的・衛生的規範の侵犯を非難していると読む解釈と、「不忠」「不敬」を糾弾していると読む解釈、の二つである。どちらも妥当な解釈だけれども、テキストの歴史的特殊性を尊重するならば、前者を汲みつつ後者に重心をおき、資本主義的欲望の過剰態に対する非難が最終的には天皇制の規範への侵犯として糾弾される、その理路を検討するのが適切だ。「不忠」「不敬」は、啓蒙不可能を超えて「愚民」に対する糾弾を可能にする。すなわち愚性そのものが糾弾されるべきだ、と。ただしこの糾弾は挫折せざるを得ない。なぜなら「不忠」「不敬」に対して唯一の正しい「忠」「敬」を提示することは実践的にも原理的にも不可能であり、また「愚民」は愚性ゆえに、「忠」「敬」と「不忠」「不敬」とをそもそも弁別することができないからである。さて同時に「不忠」「不敬」の非難は、「愚民」の撲滅に参加しないひとびとも向けられる。すなわち自己責任を口実に「愚民」

を放置し、それをのさばらせておくことが既に、「不忠」「不敬」なのだ。批判テクストは、「不忠」「不敬」つまり天皇制的規範への侵犯を撲滅することこそが「慈悲」であると説く。ところで、このような天理教が国家においていまだ存在しうるのはなぜか。テクストは国家の天理教政策が不十分であることを繰り返し述べつつ、国家は天理教によって買収されたのではないかと懸念する。それが示唆するのは、国家すらも正しいものとうではないものが弁別できないという事態である。すなわちテクストは、国家のうちに愚性と似通った運動を見いだしてしまう。みずからの撲滅対象を「愚民」と措定したがゆえに、「愚民」のテクスト内的運動によって、批判テクストは論理的混乱へと陥る。以上が第三章の骨子である。

第四章「慈悲と資本主義 天理教教祖伝テクストにおける二つの世界」は、第二章の方針に沿って天理教教祖伝テクストを構成する諸挿話を分析する。教祖伝テクストは、教祖中山みきをめぐるエピソードを語ることを通じてある種の世界観を提示し、テクストそのものを媒介としたひとびとの共同性の構築を可能にする。まず教祖伝テクストは、批判テクストからの誹謗中傷に対して論駁しうる、みきについてのエピソードを提示する。それら諸挿話においてみきは、日常性を生きるひとびとからは思いもよらない非凡な実践によって、その身に降りかかる危機的状況を克服する。人知を超越したみきの実践は、その非凡さゆえにひとびとに理解されることはなく、むしろ迫害を被る。テクストはこのようにして、通俗的な知と愚の対立を、神と人との対立そして和解へとずらす。したがって教祖伝テクストは、みきの実践そのものを解釈困難なものとして措定するのである。この非凡な実践に対するひとびとの迫害という経験、そして「神人交通」という出来事を媒介にして、テクストはみきを、ムハンマドやイエスと同様の世界的聖人へと列する。かれら世界的聖人内におけるみきの卓越性は、

それが時系列の終端、すなわち現在に出現したことに求められる。さて、人知を絶した神の領域に属するみきの実践を、教祖伝テクストはどのように語るか。人知によって理解し難いみきの諸実践の核心を、テクストは慈悲と呼ぶ。慈悲の実践は富の無限の放出、いわば資本主義的実践も求めるところとは正反対の実践である。この慈悲という概念が、みきにかかわる諸挿話にある種の全体性を付与し、かつこれらの諸挿話を媒介として、すべてのひとびとの当為へと拡張される。したがって天理教の布教されるべき領域、そして神の権能もまた、全世界へと拡張される。ところで、慈悲の実践を理解できずそれを抑圧するひとびとと日常的なありかた、つまり富の無限の蓄積を目指す資本主義的実践に対して、慈悲の実践はどのような態度をとるのか。天理教の因縁論によれば、資本主義的欲望の過剰によって、人心が神の望むところから離れたとき、すなわち神とひとびとが不調和にあるとき、神は災厄を媒介としてひとびとに警告をなす。それが災厄であるという。このようなテクストの理路を逆に言えば、災厄をもたらさない程度の資本主義的実践が存在し得る、ということになる。したがって資本主義的実践は慈悲的実践を黙殺あるいは抑圧するが、神の領域に属する慈悲的実践は資本主義的実践をある程度までは許容する、という非対称性が生まれる。テクストみきの挿話を通じて、この非対称性を物質と精神という二つの領域に拡張し、それぞれに慈悲的実践と資本主義的実践とを割り振る。すなわち物質の領域における過剰な資本主義的実践がもたらす災厄は、物質よりも優位にある精神の領域における慈悲的実践によって緩和されるのだ、と。したがって慈悲的実践は、資本主義的実践の矛盾を希釈し得ても、資本主義的実践そのものの廃絶を目指すことはない。以上の分析は、教祖伝テクストを慈悲と資本主義の二領域の矛盾として読む解釈、いわば横方向の解釈である。加えて本章は、縦方向の読みを提示する。すなわち、慈悲と資本主義の移行領域における危機と救済の共有が、みき

およびみきにかかわるひとびとの経験と、教祖伝テキストを経験するひとびとの経験を結合するのではないか、という解釈である。たしかにテキストはこの領域を、ある種の神秘的な筆致によって描いているけれども、しかしこの神秘的な領域こそが、ひとびとの個別の危機的状況を結びつけ、救済を分有させる。これが、危機の重ね合わせとしての教祖伝テキスト、という解釈である。縦と横、二つの解釈を総合したとき、何が言えるか。

教祖伝テキストの提示する世界観とはつぎのようなものだ。すなわち、ひとびとの個別の危機は、さまざまなレベルの危機と原理的に繋がっており、かつそのような危機において、資本主義的实践から慈悲的实践への、有限なる人知・人力から無限なる神への、物質中心から精神中心の生活への、劇的な移行が行われる。したがってこの世界観は、テキストが慨嘆するグローバルな矛盾についても適用される。テキストの理路によれば、一国の植民地化もまた因縁のしからしむる結果なのだから、その悲劇的困難を緩和するためには、精神の領域に対する開拓が必要なのだ、ということになる。植民地主義批判は、精神の領域に対する植民地化を要請する。以上が第四章の骨子である。

第五章「勤労神アマテラス 星野輝興の祭祀学における「革命」の問題」は、長く掌典を勤めた神道家星野輝興の祭祀学を、そのテキストから再構成することにより、星野に対する諸見解の解釈困難な矛盾を解決する方途を提起する。すなわち星野は、アマテラス一神教によって天皇統治の世界性を否定する不敬学説の唱道者として糾弾され、敗戦後には日本国憲法における戦争放棄を賞賛し、同時に官製ナチス流ファシズム神道を案出した人物と見做されている。このような多様な見解は、もちろんそれぞれの思想や立場性に基づくものとして考え得るが、しかし本論文の方法の原則からして本章は、このような相矛盾する諸見解を可能にする、星野祭祀学の

テキストの構成を分析する。さて、星野祭祀学の核心は、さまざまな問題のうちに境界線を彫琢してゆく、テキストの手つきにある。繰り返し登場する境界線の問題は、神と人との境界線に淵源すると考えられる。星野祭祀学は、この境界を曖昧にしようことを、さまざまな問題において批判する。境界線の曖昧化とはすなわち、事実を批判的に観察せず想像によって事物の本来的なあり方を明らかにし得るという考え方、ひとびとの具体的努力なくしても神に熱誠が通じれば奇跡が顕現するという考え方、高度な神学的思索によって問題解決が為され得るという考え方、森羅万象は造化神によって創造されたという考え方、したがってすべての異なる領域の知を神道神学によって基礎付け、あるいはそれを媒介として統一し得るという考え方、などである。このように、星野祭祀学テキストにおける境界明瞭化の運動は、さまざまなスケールの問題に対して適用されるがゆえに、一種の自律性を宿す。すなわち、問題の大小にかかわらず、あるいはまた星野の意図や立場性、政治的社会的な要請に左右されず、境界線の問題は同じように扱われなければならない、という星野祭祀学の自律性である。したがって星野祭祀学は、さまざまなスケールの問題が相似通った問いと答えの構造を形作るという意味において、いわばフラクタルな体系性を持つ。では、境界線の混濁を放置したとき、何が起こるのだろうか。

神と人、本来的な日本の領域とそうではない領域、国体と近代知、たゆまぬ努力と熱誠を標榜した怠惰、事物の秩序と観念の秩序、最高神と造化神などの境界をあいまいにしたとき、テキストによれば、革命が起こる。星野のテキストにおける革命とは、直接的には王朝交替を意味する。けれども星野祭祀学の理路を敷衍して言えば、革命後の世界とは、ひとびとが努力することを放棄した、事物の進歩や成長がない、非農業国である。この革命は、現実的な努力を超越しようと試みる知識人たちの観念的な努力、および現実的な努力を放棄し未熟なままにとどまることを選んだひとびと

の懶惰によって招来される。このような星野祭祀学の理路から考えたとき、一九四五年八月の敗戦そして占領は、どのように解釈されるのか。以上が第五章の骨子である。

各章での考察を総合し、結論においては、解釈困難なテキストの解釈困難さの仕組みそのものを考察する。テキストの解釈困難さは、テキストじしんの描き出した世界の二重性に起因する。テキストにおいて世界は、資本主義的实践の領域と非資本主義的实践の領域に分割される。それぞれはおおむね正反対の価値観を与えられているが、そうであるがゆえに反対側の領域に対する扱いもまた、異なったものとなる。すなわち資本主義的实践はその彼岸を、愚かで狂気に満ちた未開の周縁として理解するが、非資本主義的实践はその彼岸を、欲望と不義と不幸に満ちた哀れむべき空間として理解する。かつ本論文のテキスト解釈が明らかにしたのは、それぞれの領域における知の主要な様式が異なる、という問題である。すなわち資本主義的实践の領域が近代知を主要な知の様式とするのに対して、非資本主義的实践の領域は、象徴や言語の秩序を手がかりとして事物と世界の秩序を探究するというある種の技法を主要な知の様式としている。それぞれが、彼岸の論理を愚かなもの、秩序を欠いた真ならざるもの、と見做す。テキストの解釈困難さは、この知の様式の差異に淵源する。